

よしだのみやさいぢやうしよ
吉田宮齋場所は神楽岡にあり。「神代のとき天照太神天の岩戸に入給へば、八百万の神達集りて神楽を奏せし、其所降て山となりしより号るなり」当社は清和天皇の御宇貞観二年、中納言山蔭卿の勸請、又一説には卜部兼延の造立ともいふ。「日本記の抄に見えたり」楼門の額は日本最上両太神宮、中門の額は日本最上神祇齋場とあり、共に清水谷実秋卿の筆なりとぞ。本殿大元宮には日本神祇三千一百三十二座を鎮座し奉る、日本最上日高日宮の額は嵯峨天皇の宸筆なり、大元宮の額は後土御門院の宸筆、日本国中三千余座天神地祇八百万神の額は清水谷実秋卿の筆なり、八神殿の額は後土御門院の宸筆、此社は大内裏の時神祇官にありて八州守護の験神を崇奉らる、内外の太神宮は八神殿の左右にあり、日本国中の神祇は本殿の両脇にならびて、おのゝく国名を著し神社の数を記す、春日の社は西の麓にあり、是も山蔭卿の勸請なり。「其外撰社多しといへども委は画図に見えたり。明星水はむかし此所星落けるとなり、龍沢は春日社の傍にあり、日降坂は龍沢より本殿に登るの道なり、新長谷寺の観音は洛陽三十三所廻りの其一なり、傍に靈符神います、智福院には虚空蔵菩薩を安置す。当所は一面の岡山にして嶮からず、弥生の頃は山躑躅咲乱れて、都の貴賤童など引具しわりごさゝえをひらき、遅日を倦ずして輿に乗ず。又長月のすゑ木の葉の錦する折からも、此地に来つて秋の日の短を惜む輩おほかめり」